

八王子消化器病院ニュース

第77号

医療法人財団 中山会

八王子消化器病院

— 患者様のための医療 —

日本医療機能評価機構認定病院

〒192-0903 東京都八王子市万町 177-3

TEL : 042-626-5111

www.hachiojishokaki.com

制作 (株) 教育広報社

おおり

HACHIOJI DIGESTIVE DISEASE HOSPITAL NEWS

新年、明けましておめでとうございます。新型コロナウイルス禍も3年が過ぎ、行動の自粛や経済の疲弊も限界に達したかのように、日常生活の再開に向けて世界が一斉に動き始めました。医学的には多くの不安を抱えながらも、一度開き始めた扉は簡単には制御出来そうにありません。

さて、八王子消化器病院は本年5月に創立40周年を迎えます。当院は、1983年(昭和58年)5月、「中山記念胃腸科病院」として開設され、東京女子医科大学消化器病センターの創設者であり、初代理事長である中山恒明先生が提唱した「患者様のための医療」を病院の基本理念として地域医療に携わってきました。この理念は、今日では多くの医療機関で当然のこととされていますが、当時の医学界では医療の原点に立ち返ることを提唱したきわめて斬新なものでした。また、東京女子医科大学では医療練士制度という独自の医師教育制度を設けて、診断から治療、経過観察までを一貫して診ることのできる医師を育成し、内科・外科の医師が互いに連携して「患者様のための医療」を行ってきました。当院に集う医師たちは現在も、その精神を受継いで日々の診療にあたっています。

当院の基本理念である「患者様のための医療」とは何かと考えるとき、医療従事者



創立40周年 原点に立ち返って

八王子消化器病院 理事長 原田 信比古

一人ひとり、その捉え方や実現の仕方は異なるかもしれませんが、私は究極的には患者様の「納得」であると考えています。人はある日突然、到底納得できない病気や不幸に襲われます。人は納得できる事柄に対しては相応な試練にも耐えることができそうですが、納得できないことについては些細なことでも、この上ない苦痛を感じます。病苦からの解放は今も昔も変わらぬ医療の本質ですが、すべての期待に応えられない現実があるのもまた事実です。その期待と現実の狭間で日々闘い、少しでもその病気の苦悩を軽減したい、それが医療に携わる者の願いです。以前は、医学の粋を駆使して1日でも命の日を存することが最も重要と考えられていた時代がありました。しかし、その後「Quality of Life」(QOL・生活の質)という概念が生まれ、予後の長さよりも質が重視されるようになり、現在では個人の意思や尊厳が治療方針を決定するうえで不可欠な要素となっています。また、人には命にも代え難い思想や信仰、家族への想いがある場合もあります。人は本当に納得した時、辛い困難な治療にも立ち向かうことができ、心の底から「これでいいんだ」と思えた時、大きな困難をも受容できるのではないかと思います。単に医療者側の知識や方法論で治療を推し進めていくのでは

なく、対話によってお互いの理解を深めながら最もよい治療を探していく病院でありたいと思います。

九州大学第一外科初代教授・三宅 速(みやけ はやり…1866-1945)は「引導をわたせる医者となれ」という言葉を遺しています。「患者さんやその家族に「この人に脈をとつてもらいたい」と、いまわの際に呼ばれるような医者になれ。そう言ってもらうためには、自らの心も養わなければならぬ」。この言葉は単に心情的なことを説いているのではなく、患者様が治療に未練を残さず、その手当に満足しながら最期の時を迎えられるためには、医療者側に相当レベルの知識と技術をして、その信頼に応え得る誠実さが求められていることを表しています。この言葉の中の「人・医者」を「病院」と置き換えれば、そのような病院になれたとき初めて私たちは「患者様のための医療」に一步近づけるのではないかと思います。すべての病苦からの解放を目標に高いレベルの治療を行いつつ、その期待に沿えない場合にも「納得」していただける信頼関係の構築こそ医療の本質であると考えています。この当たり前のことを地道に実行し、今後も皆様のご指導をいただきながら、患者様に「納得」していただける医療を目指してまいります。

創立40周年の節目を迎え改めて医療の原点に立ち返り、今後も東京女子医科大学消化器病センターの医療を継承していくと共に、なお一層信頼される病院となるよう努めてまいります。

本年もよろしくお願いたします。

※比企寿美子著「引導をわたせる医者となれ」1999 春秋社

もっと知りたい!

身体 治療 のコト 病気

潰瘍性大腸炎について

消化器内科 医師 原 敏文

◇はじめに◇

潰瘍性大腸炎 (Ulcerative Colitis: UC) は、原因不明の難治性の慢性炎症性腸疾患であり、現在の進歩した医学においても根本的な治療法が確立されていません。近年、患者数の増加に伴い広く認知されるようになり、当院においても診察する機会が増えています。

この疾患は、若年層の患者の割合が比較的多く、また症状が良くなったり(寛解)、悪くなったり(再燃)を長期間にわたり繰り返すことも特徴として知られています。このため、学業・就職・結婚・出産・子育て等のライフイベントに影響を及ぼし、患者のQOL (Quality of life: 生活の質) が大きく障害されることがあります。そのため、病因の解明と病態に基づいた治療が望まれますが、現在では徐々に病因が明らかとなり、様々な治療方法が開発されています。今回は本疾患(以下「UC」)の基礎知識について、ご説明いたしますが疾患を、より良くご理解いただくことで、患者の皆様とご家族が平穏な日常生活を送るための一助になれば幸いです。

◇疫学◇

UCは1875年に英国で初めて報告され、本邦では1928年に報告されました。その後、1973年に当時の厚生省に研究班が発足し、1975年に同省の定める特定疾患に認定されています。以降、国内の患者数は増加の一途にあり現在では20万人を超え、もはや希少疾患とは言えないとの声もあります。

発症時の年齢は15歳から35歳までの若年層が多いですが、40〜50代位までの幅広い年代でもみられます。また、有病率は30代で最多となりますが、近年では高齢での発症も確認されています。なお、発症率に男女差はありません。

◇病態◇

UCは、大腸の粘膜に慢性炎症または潰瘍や「びらん」ができる原因不明の疾患です。炎症は、直腸から連続的に始まり、最大で大腸全体にまで拡がる可能性があります。類型としては、炎症が直腸に限局する直腸炎型、大腸全体の左側半分までの左側大腸炎型、全大腸に及ぶ全大腸炎型と病気の罹患範囲で3分類されます。そのうち最も多いのが、全体の4割

を占める全大腸炎型になります。炎症が及ぶ範囲に応じて大腸の機能が障害されるため、便が泥状や水様となります。

◇症状◇

典型的な症状は腹痛、下痢、粘血便です。最初に出現する症状は下痢であるため最近、下痢の頻度が多くなったと感じた時は要注意です。また、直腸から炎症が起きているため残便感を覚えることも多く、症状が進行すると排便のコントロールが難しくなり、便失禁を来すこともあります。この他に症状の日内変動があることも特徴的であり、早期に症状が強くなることが知られています。なお、このような症状を自覚した場合でもUCは慢性の経過を辿る疾患であるため、発症から数日程度で改善するような場合は、感染症や食中毒、薬剤による腸炎が疑われます。

◇病因◇

UCの原因は現時点では特定できていませんが、徐々に発病のメカニズムが解明されてきています。①ストレス、食事、腸内細菌といった環境因子と②免疫(白血球をはじめとした外敵から身体を守る防御システム)と関連した感受性遺伝子を保因している等の遺伝的因子を背景として、免疫異常を来すものと考えられています。そして、免疫が破綻を来して異常に働くことで、自分の大腸を外敵として認識し攻撃してしまうことが原因とされています。

◇予後◇

統計によると、発症から10年間で約半数以上の患者が症状の再燃を繰り返すことが知られており、寛解を維持されている方は25%となっています。一方、UCに罹病した方の生命予後は健康な方と格差のないことが知られています。なお、「若年発症」、「罹病10年以上経過」、「全大腸炎型」、「炎症コントロール不良」であると大腸癌を合併するリスクが上昇します。その確率は、罹病20年で7%、30年で17%と報告されているため、定期的な内視鏡検査での評価や適正治療を継続して行うことが重要となります。

◇最後に◇

昨今のUC治療薬の進歩は目覚ましく、沢山の新規薬剤があります。各薬剤によって効果、使用方法、注意点が異なり、治療の選択肢は多岐にわたることから専門性が求められます。

なお、UCの薬物療法については、次号でご説明させていただきます。当院には、若年から高齢の方まで幅広い年齢層の方が来院されています。そのため、各年齢に応じたライフイベントを大切にできるよう、お一人おひとりの背景やご希望に寄り添ったオーダーメイド治療を提供できればと考えています。UCで困ったことや気になることがありましたら、些細なことでも結構ですので気軽に相談ください。

秀吉のやきもち

八王子市明神町 在住
西室 博史さん



新年おめでとうございます。

皆様方には、静かなお正月を迎えられたこととお喜び申し上げます。本年も又、一年間無事に過ごされんことを願っております。私事ですが、有難いことに、母が健康で丈夫な体に産んでくれました。自慢になりませんが今まで何年も健康診断を受けたことがなく、しかも血圧も自分で気に掛けて測ったことがないという状態です。テレビCMで「自分防衛団 130超えたら高めです」こんなのが有りますが、自分の血圧が幾つかも知らない有様で、健康には自信を持っていました。しかし、ある日、急性体調を崩し、消化器病院にお世話になったという次第です。胃の内視鏡検査の時に、目をきつくつぶっていましたら、看護師さんが背中を擦ってくれました。これは気持ちがいい。

話変わって私は実は、横山町できもの屋を営んでいる関係で、お客様にお茶の先生方が多

く、また家内が裏千家をやっていることから抵抗なくお茶の世界に入れました。今は恥ずかしながら、表千家のお茶の先生をやらせてもらっています。

茶道の始まりは、千利休です。利休は、「革命を起こした」と言っても過言ではない気がします。お茶には二種類ありまして「濃茶」と「薄茶」です。秀吉やその旗下の大名達が飲んでいたのは濃茶と呼ばれる物で、薄茶の約二倍の濃さのお茶です。この濃茶は足利將軍は一人分を一碗に入れて飲んでいましたが、利休は、濃茶は親しい人達数人で飲み回しにしようと提案しました。

この飲み回しが連帯感が付くというので、明日は戦で死ぬかも知れないという当時の武将に受け入れられ、お茶は一気に広まりました。また、足利時代は、身分制度の為に別の部屋でお茶を練り持つて出ました。ところが信長・秀吉時代からは目の前

でお茶を練り、客に出す様になりました。このオープンキッチンタイプでは毒を入れることができないということ定着しました。また、当時は、「茶の湯」と呼ばれて、この濃茶の前に食事の膳が出ました。膳は最上の場合「七五三の膳」と呼ばれ、本膳には七菜、二の膳には五菜、三の膳には三菜、しかも、本膳の前には、州浜台(飾り台)が置かれ、この台に模型の松や鶴亀を飾るのが習わしでした。利休はこの接待の型を止めました。余分な飾り物をなくし、食べ物を作り置くのではなく、温かな物は温かく、食べられる分だけ出すようにしました。しかも、食材は先取りの珍しい物ではなく、その時の旬な物を選びました。勿論、季節感は大切に

し、使う道具で季節感を更に盛り上げたのです。例えば、お正月には正月だけにしか出ない道具があります。正月ですから式正な物を選びます。時代の古い棚・台子(鎌倉時代に中国から持つて来た物)か利休の先生の武野紹鷗(たけのじょうおう)が考案した紹陽棚(じょうおうたな)を使います。この大きな棚を見るだけでも心が正月気分になります。又、道具は漆塗りが多く、蒔絵が施されているこ

とが多いです。蒔絵には季節を楽しむ文様が描かれています。お茶は、茶の美味しきよりも、お茶を取り巻く歴史がとても面白いのです。利休にまつわる逸話は数多くありますが、一番有名なものを一つ。「お茶の極意は何ですか」と問われると利休は、「茶は服のよきように、炭は湯の沸くように、花は野にあるように、夏は涼しく冬は暖かく、刻限は早めに、降らずとも傘の用意、相客に心せよ」と。もし、これができれば、いつでも私は貴方の弟子になりましようと思えています。利休七則と呼ばれるものです。

最後に利休切腹の話です。秀吉は、何をやっても日本で一番なのに茶の湯だけは利休に適いません。お茶に対する美的感覚の素晴らしいスパースターの利休が現れて、秀吉は一種のやきもちを焼きます。そこで利休は「殿下恐れ入りました」と負けてやれば良いのに「傲慢な堺の商人魂」が邪魔をして謝るところをしません。この辺りの二人の行き違いが利休切腹の一因とも云われております。桑田忠親著「千利休」によると、茶碗等の道具を高く売りつけた、娘を秀吉の側室に出すことを断つた、朝鮮出兵に口うるさく反対した等です。特に、九州大名の大名・大友宗麟が国元へ送った手紙には、「内々の事は利休に、公儀の事は秀長(秀吉の弟)に」そして「利休以外、関白様へ一言も申し上げる人がいない」と有ります。このことからして利休が秀吉体制のトップクラスに居ることが分かります。秀吉が、ふと気が付いてみると信長・秀吉と築いてきた武家を頂点とするピラミッドの秀吉の直ぐ下に商人が居る、しかも各大名に尊敬されている。この口うるさい商人を取り除かなければ武家体制が確立されないと秀吉は思い、そこで大徳寺の山門事件を起こして利休を切腹させたというのが桑田忠親の説です。ここで、お茶の教室の宣伝です。お茶の稽古は毎回違います。せっかく覚えたのに又違うと言われるますが、それで良いと思います。稽古場では、頭の体操をしながら非日常を楽しんでおります。是非一度体験にお出かけください。



赤いあ吉茶会(へ)に免、大友宗麟が国元へ送った手紙には、「内々の事は利休に、公儀の事は秀長(秀吉の弟)に」そして「利休以外、関白様へ一言も申し上げる人がいない」と有ります。このことからして利休が秀吉体制のトップクラスに居ることが分かります。秀吉が、ふと気が付いてみると信長・秀吉と築いてきた武家を頂点とするピラミッドの秀吉の直ぐ下に商人が居る、しかも各大名に尊敬されている。この口うるさい商人を取り除かなければ武家体制が確立されないと秀吉は思い、そこで大徳寺の山門事件を起こして利休を切腹させたというのが桑田忠親の説です。ここで、お茶の教室の宣伝です。お茶の稽古は毎回違います。せっかく覚えたのに又違うと言われるますが、それで良いと思います。稽古場では、頭の体操をしながら非日常を楽しんでおります。是非一度体験にお出かけください。

アートの力で病院をもっと心地よい場所へ

事務長 大津 行博

東京五輪・パラリンピックに沸いた昨夏ですが、今では遠い思い出の感があります。一方、スポンサー契約を巡る一連の不祥事に關する昨今の報道を見聞きするにつけ「お・も・て・な・し」で幕を開けた大会だけに、表はなくて裏があつたのかと勘繰つてしまします。

その「おもてなし」ですが、医療機関もサービス業のひとつと言われるようになって久しく、特に厚生労働省が2001年に策定した「国立病院等における医療サービスの向上に關する指針」を契機として、医療界全体で接遇マナーの向上に取り組むようになりました。

医療機関では、お帰りの際に「お大事になさってください」と言い添えますが「また、お越しく下さい」との言葉を耳にされたことはいないかと思ひます。何故ならば医療機関は、積極的に訪れたい場所ではないからです。東京デイズニールランドには笑顔で足を運ぶ皆様も、同年(1983年)に開設された当院には、検査・治療に伴う不安や心配等を抱いて来院されます。愛らしいネズミのキャラクターやスリル満点のアトラクションは、私達には用意できません。それでも質の高い医療と思ひやりのある接遇に加えて、新型コロナ禍においても病院をもっと心地よい場所にするための「おもてなし」の形がないのかと模索し

ていたところ、病院長からホスピタルアートについての提案がなされました。

ホスピタルアートとは、アートの力で病院等の医療環境をより快適な癒しの空間とする取り組みで、欧米では既に20年以上の歴史があります。なお、ホスピタルアートの先進国といわれるスウェーデンでは、公共建築(病院も対象)の新設や改築時には全予算の1%以上をアートに充てるのが法律で義務付けられています。昨今では我が国でも、この考えが広がりつつあり、医療機関や介護施設等においてもデザインやアートの彩りが添えられているのを目にするようになりました。

現在、当院では「アートの力で病院をもっと心地よい場所へ」と題し、市内の東京造形大学様(グラフィックデザイン専攻領域・福田秀之教授・受講学生)のご協力の下、ホスピタルアートプロジェクトを進めています。以前から「暗くて寂しい」「殺風景で味気ない」という意見が上がっている地階(放射線科エリア)を優しい空間にしたい」との私達の想いに対し、同大学が賛同してくれました。

昨年5月の現地視察では、初めて訪れる病院という非日常的な空間に、学生の皆様の多くが興味津々の様子でした。そして、病気を抱える患者様の心情や医療者として大切にしていること等の当院職員に対するヒアリングを通して、自分達にできることは何かと徐々に真剣な表情に変わっていったことが印象的でした。その後、12月に開催されたプレゼンテーションでは「生命」「八王子の今と昔」「折々の八王子」のテーマ毎にコンセプトや背景、具体的な技法等を交えた説明がなされました。いずれも私達の想いにつっかりと応

えてくれる内容で、作品に対する熱意が感じられたと共に、患者の皆様にも喜ばれるものを協同して作り上げたいとの想いを強くしました。

本プロジェクトは、本年3月末の作品完成に向けて進行中です。病院という制約の多い空間が少しでも心地よく穏やかに居られる場所となり、治療に臨む方々が前向きな気持ちになられたら幸いです。なお、このホスピタルアートを患者の皆様と共に作り上げたいとの趣旨から、現在ご芳志を募っております(募集期間・2023年4月末日まで)。ご賛同いただける場合は、院内各所および当院ウェブサイトにて詳細を掲出しておりますので、ご覧下さい。

《八王子消化器病院 ホスピタルアートプロジェクト》

- 企画名: アートの力で病院をもっと心地よい場所へ
- 施工場所: 地階(放射線科エリア)
- 方法: 絵画を描いたパネルを壁面に掲げる。
- 実施期間: 2022年4月~2023年3月(予定)
- 協力者: 学校法人桑沢学園 東京造形大学
グラフィックデザイン専攻領域 教授 福田 秀之氏および受講学生



現地視察: 2022年5月



プレゼンテーション: 2022年12月

思うこと

門松や アルバム辿る 四十年

本年は当院にとって昭和58(1983)年の開院から数えて満40年になります。

開院当初の「何もかも無い無い尽し」の苦難の昭和に始まり、名称変更(中山記念胃腸科病院→八王子消化器病院)、そして移転新築(子安町→万町)が成った躍動の平成を過ぎて現在に至っており



ます。令和に入ってからにはコロナ禍、経済状況悪化等々で混乱する社会の荒波の真只中にあり、不惑にもかわらず、この節目の年を如何に克服し、乗り越えていくかの正念場にかかっています。本年の干支の卯(兎)の敏捷活発なパワーと明晰な頭脳にあやかり、10年後の50周年に向けて進化し続ける病院としての体制固めに邁進して参ります。

理事 久野久夫